

歌仙堂かせんだう

〔又の名は大雅堂たいがだうといふ、双林寺境内門前の北にあり。別室に觀世音くわぜおんを安置す、金銅仏、長は五寸五分許なり〕此堂の名を歌仙堂かせんだうといふは、ちかきとし池野秋平いけのしゅうへいといふ風流の人ありけり。和歌は冷泉家の門れいぜいけに入て、書画を善す、名は無名、字は貸成たいせいとつきて大雅堂たいがだうといふ。今より十とせあまり一とせのむかしに歿せられき。其門葉其址を空しくせんもびんなき事とて、古へ靈山てんさいをうちやうしやうしにて天哉翁長嘯子てんさいをうちやうしやうしがいとなみ給ひし歌仙堂かせんだうの古き柱礎ちゆうそなどありしを、かの山の坊やまのぼうよりもらひ、これを基としこゝに建て、楼の上に六畳下に六畳の藁わらを敷て、歌仙堂かせんだうの旧蹟をとゞむ。軒の瓦にはかの大雅堂たいがだうといふ篆印を瓦に造りて葺けるなり。是なん中尾氏なかをうちといふ人、其材石の用を扶て建られしとぞ。貸成たいせいは洛らくの北西陣きたにしちんといふ所の産にて有ける、中頃は二条のひんがし樋口ひのくちの町にすみ、聖護院しやうごゐんの邑にうつり、又知恩院ちおんゐんの西なる袋町ふくろまちに廬を転じ、遂に祇園ぎをんの南葛買居かつたんきよに終をとり、宿坊すくぼうの浄光寺じやうくわうじに葬らる。其墓碑は大典禪師だいてんぜんじの書給ふをこゝに載す。

篆額は芙蓉房ふようぼうの書なり。

池貸成歿矣。既表墓焉而未レ有レ銘也以為レ請。余嘗觀二貸成為レ人二蕭散不下以二寵辱二驚心善与レ物和不二苟合一。紆志外踈放ニシテ而内実修ニシテ。与人交謙損而不レ阿。簡二於礼法一。当レ往。不レ住当レ答不レ答而顧二諸義一未二嘗有レ所レ失。惠ニシテ而弗レ望。廉ニシテ而弗レ■其於二取予得失一。恬淡如也。平生行レ事。多出二於人之所レ不レ意。於レ是有二畸人之目一焉。貸成生二平安一。幼ニシテ而穎異学文学レ書無レ不能。而独長二於絵事一。山水尤妙。好遊二名岳一。尤■健高峻幽奥無レ不二戻極一。即取以為二毫端趣一。数登二富士一而每異二其路一。因作二富士図一。各變二状態一。皆其所二経覽一。古今画工所未レ及

也。安永丙申四月十三日。病卒于葛原艸堂。距生享保癸卯五月四日。得年五十有四。葬于舟岡之南浄光寺先塋之側。貸成名無名始名勤。遠近皆以大雅堂稱之。妻玉瀾姓徳山間靖不飾。能配夫之行亦能画有名。無子。家絶。悲夫。世皆知大雅之画而不_レ知其行。知其行而不_レ知其心。故為叙其大略。如其世則存焉。不待論也。銘曰 若人胡不_レ壽。若人胡無_レ嗣庶安_レ子哉。浄光之地。

安永六年丁酉六月

淡海竺常撰 韓天壽書

〔こゝに今よりいそしの春秋のむかし、享保の頃下河原に茶店をかまへし女あり、名を梶といふ。睿顔おのづからの美艶ありてつねに粧粉をほどこさず、ゆきゝの人は目を送りけるとぞ。和歌を好む、梶の葉といふ集あり。〕

雪ならば梢にとめてあすやみん夜のあられの音許して

梶

此梶の跡を嗣で又百合といふ女あり。夫と共に東武より来り、漂流して真葛原に茶店をいとなみなりはひとせり。此女も和歌を嗜て早百合葉といふ集あり。百合のむすめにまちといふあり、是大雅堂貸成が妻なりけり。画は大和の柳里恭に学んで、夫の風流に従ひ、玉瀾といふ。和歌は夫婦共に冷泉家の門につらなりける。あるとしの春のあした、若菜に梅ををりそへて携へ殿参し上りける時、為村卿御うたを賜ふ。

つむ若なをりそふ梅の色もかも春のこゝろの花かたみかも

又ある日殿参しける時、まち女に遊可といふ名を賜り、其うへに白き手巾赤き蔽膝を賜ふ。これよりとしのはじめのお

んよろこびには、手巾をかしらに置蔽膝を腰に絡ふて参りけるとなん。此人も三とせのさき、辰のとしの末の秋下の八日にはかなくなりける。今はむかしとなりて、これらの品も大雅堂たいがだうに蔵めありけるとなん」

娘のもとへまくづの花を送りて

真葛葉の色しあせずよやしなひし親の守りの花にひとふさ 百 合

さくら花色うつろはでいにしへの春のまゝなるかに匂ふらし 玉瀾 遊 可

画士峰十二軸ぐわしほうじふにしう〔貸成の筆にして、各四時の変体なり。大雅堂にあり〕石■器ちやうしやうし〔長嘯子の持物なり、靈山にありしを歌

仙堂せんだうと共にこゝに遷す〕真葛艸〔初めは真葛原葛覃居にあり、こゝにうつし植る〕

芭蕉堂ばせうだう 双林寺さうりんじの境内、西行庵さいぎやうあんの西にいとなみしなり。

いにしへころひがし山にあみだ房と申ける上人の菴室にまかりてみ

けるに、哀とおぼへてよみける、

山家集 柴の庵しばいほときくは賤しき名なれども世にこのもしき住るなりけり 西行法師

此うたはひがし山にすみける僧をたづねて、西行さいぎやうのよませ給ふよし、

山家集にのせられたり。いかなる住居にやと先その坊なつかしければ、

小文庫 柴の戸の月やそのまゝ、あみだ坊 は せ を

芭蕉翁肖像 〔こゝに安置す、木像八寸許。此影像是はせをの翁の愛し給ふ桜樹のありしを、歿せられし後のとし、門

葉の五老井許六といふ人きざみ給ひ、大津の智月尼といふに与ふ、かの文に見ゆ。それより智月の従者宗寿尼といふも

の貫ひ、我故郷越の方へ持かへり、越中の国の農家にありて年久しく煤埃に黒みありしを、高岡金屋氏の手にわたり、

其後富山医生橋氏といふ人これを乞ふて、文と共に伝来しけり。厥后加賀の金府の吉良が方へさづかりける。此ものは

今の半化房の門人なるゆへ、亡命の後遺言により半化房の許に遷しける。しかあれば芭蕉翁のこのほ句を基として、

こゝにはせを堂をいとなみ安置しけるなり。其側に南無菴といふあり、是も此発句の謂によりて名づけしなり、是なん

半化房闌更が舎なりけり。其許六が文に曰、

御床敷節、せうそこ御無事のよし目出度存候、拙者いまだすきと無御座候、像も及延引候、此度翁もてにふれられ

しに五老井の古木にて刻まいらせ候、別紙も添へ、兼而大きな像刻度望御座候得共、病氣にてかなひがたく候、

尚又得御意可申入候、不備。

十月三日

霜のゝち像にそふべき菊もなし

許

六

芭蕉翁碑ばせををうのひ 「双林寺の内、西行の塔の側にあり、美濃の東華坊支考とうくわぼうしかうこれを書して建られしなり。毎歳三月十二日墨直しといふ事あり、獅子庵ししあんの支流しりうろ廬元げん、呉竹ごちく、再和さいわなどの門派の人々、美濃より上洛して碑文の墨を修補し、当山において俳筵を催しけるなり。其碑文に曰、

我師が伊賀の国に生れて、承応の頃より藤堂の家につかふ。その先は桃地の黨とかや、今の氏は松尾なりけり。年また四十の老をまたず、武陵の深川に世を遁れて、世に芭蕉の翁とは人のもてはやしたる名なるべし。道はつとめて今日の変化をしり、俳諧は遊びて行脚の便を求むといふべし。されば松島は明ぼの、花に笑ひ、象潟はゆふべの雨に泣とこそ、富士よし野の名に対して吾に一字の作なしとは、古をつたへけふをしふるの辞にぞ、漂泊すではたとせの秋暮あきは難波なにはの浦うらに世をみはてけん。其頃は神無月の中の二日なりけり。さるを湖水のほとりにその魂をとめて、かの木曾寺きそじの苔の下に千歳の名は朽ざらまし、東華坊とうくわぼうこゝに此碑を造る事は、頓阿とんあ西行さいぎやうに法筵を結びて、道に七字の心を伝ふべきとなり。

あづさ弓 武さしの国の 名にしあふ 世に墨染の 先にたつ

人にあらずに ありし世の 言の葉はみな 声ありて その玉川の

みなかみの 水のこゝろぞ 汲てしる 六すじ五すじ たてよこに

流てすゑは ふか川や 此世を露の をきてねて その陰たのむ

その葉だに

いつ秋風の

やぶりけむ

その名ばかりに

とさゝをきぬ

春をかゝみの

人も見ぬ

身を難波津の

花とさく

はなの鏡に

夢ぞ覚ぬる

背文

維石不言

謎文以伝